

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 189, 2020

## VIEW 展望

開かれたコミュニティに向けて／第24期会長 齊藤 綾子…2  
 展望に代えて／第24期副会長 大橋 勝…3  
 バンザイの後に／第24期副会長 古賀 太…3  
 思ってもみなかったこと／第24期総務委員会委員長 佐藤 由紀…4  
 しなやかな連帯へ／第24期研究企画委員会委員長 富田 美香…4  
 画面越しの連帯／第24期機関誌編集委員会委員長 伊津野 知多…4

## INFORMATION 学会組織活動報告

ビデオアート研究会…5 アナログメディア研究会…6-8  
 アジア映画研究会…8 第46回大会第一通信…9

## FROM THE EDITORS

編集後記…9

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第189号」2020年10月1日発行  
 発行人：齊藤綾子 編集担当／総務委員会（西村安弘・岡島尚志・佐藤由紀・加藤哲弘）  
 日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
 e-mail：office@jasias.jp https://jasias.jp/



日本映像学会

# 開かれたコミュニティに向けて

第24期会長 斉藤 綾子

このたび日本映像学会の第24期会長を拝命した。理事を一期お休みした後ですっかり浦島太郎状態だったし、まったく予想もしていなかった展開だった。元来人前に立つのは好まないし、日本の学术界に疎く、学会の常識もない。完璧な武田潔前会長のお仕事を継ぐには、私よりふさわしい理事はいらっしゃる。だが、思うところあって学会「初の女性会長」という役目をお引き受けした。

本来だったら「初の女性会長」として具体的な展望を示すべきなのだろうが、申し訳ないことに特に展望らしきものがあるわけではない。学会運営に関しては恒久的な問題はあつたものの、すでに武田前会長が運営上の改善への道筋を示して下さっている。ただ、一つだけ私の基本方針のようなものがあるとすれば、「初の女性会長」という体制を支持して下さった今期の理事の方々全員の協力を得ながら、「チーム」で学会運営を進めてゆきたいという点だ。その一つの形として、副会長を古賀太・大橋勝理事のお二人に、そして、富田美香さん、佐藤由紀さん、伊津野知多さんという三人の優秀な女性たちに「初の女性委員長」として助っ人を頼んだ。そして各委員会を各支部からベテランの理事と若手の理事がバランスよく構成するように副会長、委員長と相談して決めた。このような体制が可能になったのは、コロナ禍で理事会をオンラインを基本にするという方針を今期理事会で採用したからである。オンライン化は出張費の削減のみならず、関東以外の理事の方々にも会議参加の負担が若干なりとも軽減されるのではないかと考えている。私の希望を尊重し、支持して下さった理事の皆さんにまずお礼を申し上げたい。

さて、今回会長をお引き受けする気持ちになったのにはいくつかの理由がある。第一に、木下千花さんが『映像学』の『巻頭エッセイ』で「映像のフェミニズム」という画期的な特集テーマを組んで下さり、それにエッセイを投稿する機会を持ったこと。私には絶対に発想が及ばない木下さんの企画力に感銘を受け、一気に道が開けたように思った。第二に、フェミニズム研究に従事するようになってかなり経つが、投稿したエッセイでも少し触れたように、デルフィーヌ・セイリグがドキュメンタリーで語った言葉、それは、現在の私たちがあつたのは前例を作ってくれた女性たちがいるからという歴史の重みを、年を重ねるにつれてより一層強く意識するようになったことがある。付け加えれば、不当逮捕され、拘留もされた元厚生労働省局長・村木厚子さんがあるインタビューで女性に向けたメッセージとして、「何かオファーがあつたら断らない」という一言もずっと気になっていた。

思えば、私が映像学会に入会したのは1989年。その経緯は、今は退会されたが、何度か会長もなされた岩本憲児氏に多くを負っている。詳細は忘れてしまったが、当時UCLAで博士論文のテーマに悩んでいた私は何かのきっかけで学会の存在を知り、見ず知らずの岩本先生に不躰にも手紙を書き、博論のテーマに関する質問と学会に入会したいというようなことを書いたように思う。少し時間がたってから先生から丁寧なお返事とアドバイスを頂き、入会できたことも知らされた。多分、最初は「海外会員」という立場だったように思う（恥ずかしい話だが、入会条件の推薦人2人も岩本先生が依頼して下さったことに自分が理事になってから気づいたという暢気者である）。

その後、1992年にアイオワ大学で「Image theory, image culture and contemporary japan」というシンポジウムがあり、「歩く柄谷行人」を見たいのと岩本先生にご挨拶を兼ねて、アメリカ国内の学会に初参加した。その時に浅沼圭司氏、近藤耕人氏、アーロン・ジェロー氏にも

初めてお会いした記憶がある。

学会活動に本格的に参加したのはアメリカから帰国した94年、岩本先生が世話人だった「映画史研究会」に出席した時である。岩本先生以外、誰一人として知らなかった。マルヴィの論文の翻訳は92年『イマーゴ』に掲載されており、その次の研究会でフェミニズム映画理論について発表するように誘われ、7月に発表したのが多分日本での学術デビューだと思う。映画史研究会では武田さん、富田美香さんを始めとして、志村三代子さん、晏妮さん、鄭秀婉さん、スザンネ・シェアマンさん、村山匡一郎さんなど多くの方とお知り合いになった。

日本の研究基盤もネットワークも持っていなかった私にとって、やはりアメリカにいた時に手紙でやりとりをするようになった岡島尚志さんにお声がけしていただいたフィルムセンター（現国立映画アーカイブ）でのお仕事とそこで知り合った素敵な方々、そして、岩本先生始め、映像学会で知り合った素晴らしい人たちとの出会いがすべての始まりだったのである。今思えば、本学会が、学術研究者のみならず実制作、上映、アーカイブ関係者を含む広く映像に関わる人々が集まったユニークな学会だったからこそ、私のような「外様」も快く受け入れてくれたのだろう。

私にとって映像学会が日本の研究者たちのコミュニティの一員になるきっかけになったように、たとえ「名ばかりの女性会長」だとしても、まがりなりにも私が会長になり「初」のハードルが越えられたことで「女性会長」の敷居は当然低くなったし、いずれ女性会長も当たり前になるだろう。その第一歩として、今期のチームを会員の皆さんには暖かく見守っていただければ幸いである。すでに今期の活動は始まっているが、理事会や委員会で理事の皆さんの様々なご意見やご提案に早くも助けられているのを実感している。また、会員の皆さんには積極的な学会活動への参加をお願いしたい。年二回の学会誌の発行は編集委員会にとっては大きな負担となっているが、若き会員にとっては学会発表と機関誌投稿の機会が合わせて、一年に複数回ある学会は極めて珍しいし、研究会の活動助成金なども厳しい財政状況から捻出して支えているが、このような体制を維持するのは理事の皆さんのみならず、会員各位の協力あつてこそである。

とにかく、今の時代、男女を問わず決して楽ではない道を、でも好きであるからこそ手探りながら探っている若い会員たちに何らかのメッセージになればというのが、甚だ頼りない会長で申し訳ない限りだが、私の展望らしからぬ展望のようなものである。

最後になったが、今年はコロナ禍で大会のキャンパス開催が困難になり、オンライン開催という異例の形で大会が実施された。このような大幅な軌道修正にも、新しいプラットフォームを使いこなして、臨機応変に対応して下さった関西大学大会実行委員の皆さんに、特に委員長の門林岳史さんに心からお礼を申し上げたい。オンライン開催が可能になったのは、大会実行委員会の冷静かつ適切な対応のお陰である。そして、21期から3期に亘って学会運営に情熱的に関わり、学会については生き字引のように知り尽くし、学会の発展と充実のために類を見ないほどの貢献とご尽力を捧げて下さった武田潔前会長に改めて深謝したい。これからも、一会員として学会活動のさらなる充実にお力添えを頂ければ幸いである。

(さいとうあやこ／会長、明治学院大学)

# 展望に代えて

第24期副会長 大橋勝

日本映像学会第24期役員は斉藤綾子さんを会長に戴き、各委員会も全て女性委員長を配し、これまでの学会の風景を刷新する画期的な構成になりました。しかし同時にベテランと若手、所属支部、専門性などしっかりと全体のバランスを配慮した配置になっています。これは役員を決める会議、打ち合わせの中で垣間見たきめ細やかで丁寧なやり取りの賜物であると思います。コロナ禍の最中、全てオンラインおよびメールでのやり取りでありましたが、少なくとも不都合なことは全くありませんでした。

私は1990年頃映像学会に入会いたしました。振り返ってみて入会当初はあまり熱心な学会員ではなかったと思います。その当時の私の関心は、自分自身の創作と学生とのワークショップ的コラボレーションが中心で、それらは学術的な活動とは一線を画するものだと思込んでいました。そんな私でしたが、当時映像学会関西支部の中心的存在であった大阪芸術大学の山田幸平先生、吉岡敏夫先生は、たまに顔を出した研究会で非常に懇意にしてくださいました。山田先生は私のことを松本俊夫先生の秘蔵っ子と思込んでいて、私に松本研究を期待する旨を再三おっしゃっていました。これは国立国際美術館（大阪）での特集上映会（「松本俊夫の軌跡」2018年3月）を企画実施することで、形を変えて自分なりに応えることができたと思っています。

2001年に大阪芸術大学で年次大会が開催された際に手伝いの支部運営に参加するようになり、その後幹事となりました。その間大学での上司でもあった豊原正智先生には大変お世話になり、学会における様々なことも指導いただきました。また関西学院大学の永田彰三先生、加藤哲弘先生らとも親しくさせていただきました。

ここ数年は兄貴的な存在であった遠藤賢治先生と二人三脚で関西支部事務局の運営に取り組んでまいりました。この2月の遠藤さんの亡くなった日、私も大阪芸術大学に出勤しておりました。卒業制作の学内展に合わせてオープンキャンパスが実施され、体育館のアリーナに学科ごとのブースを設け、受験希望者の質問相談に応答する業務です。私（映像学科）と遠藤さん（キャラクター造形学科）のブースはアリーナのトイ面に位置し、特に挨拶するまもなく来客に対応しているうち、気づくと遠藤さんは会場にはいませんでした。

今回、副会長と同時に関西支部担当を賜りましたが、これは関西支部会員の皆さんの意見を学会の運営に十全に反映させるという役割を付託されたことだと考えます。自分なりに応えていこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（おおしまさる／副会長、大阪芸術大学）

# バンザイの後に

第24期副会長 古賀太

斉藤綾子さんが会長になられて「バンザイ!」と叫んだのは、私だけではありません。業績、お人柄ともにまさに会長にふさわしいのはもちろんだが、それ以上にこれまで創立以来50年近く男性が支配してきた日本映像学会会長職に女性が就いたことがなによりすばらしい。斉藤さんはこれまで「会長になるくらいなら学会を辞めます」と公言されてきたのでとても実現は無理と思っていたが、いろいろな経緯の中で引き受けてくださった。

私が最初に斉藤さんにお会いしたのは1995年秋だから、もう25年前になる。彼女は米国から帰国されたばかりで、フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）の客員研究員として働いておられた。1996年11月から始まった「ジャン・ルノワール、映画のすべて。」では、米国関係機関との交渉を担当してもらった。96年の4月末には一緒にカリフォルニアに行き、UCLA大学図書館のアーツ・ライブラリーでルノワールのご息アランさんが寄贈した写真資料を3日間調査した。さらにアランさんの住むサクラメント市郊外の山中まで行って、アランさんにインタビューをした。楽しく、刺激的な日々だった。斉藤さんはUCLAの図書館とアポを取り、インタビューを起こすのみならず、ロスではレンタカーまで運転してもらった。

その後私はイベント屋を10年以上続けたが、斉藤さんは博士論文をUCLAに提出し、日本の大学にポストを見つけ、精力的な研究活動を展開されたのはみなさんご存じの通りである。もともと彼女は大学を出て一般企業に何年も務められていた。そんな方がUCLAで映画研究に目覚め、英語で博士論文を書かれたのだから、人生何が起るかわからない。

私は2009年に今の大学に職を得た。これまた何が起るかわからない展開だったが、やはり計20年以上イベント屋をやって毎晩酒ばかり飲んできたため、もはや研究活動はかなり難しい。しかしアートや映画の内外の専門家たちをつなぐコーディネーターとしての仕事が長かったため、この学会でもそういう役割なら演じられるだろうと、機関誌編集委員長まで引き受けた。これは少し無理があったが、木下千花副編集長ほかみなさんに助けられた。

ルノワールの映画祭の時には斉藤さんに大いに手伝ってもらった。今回、副会長としてそのお返しを少しはしたいと思っている。「バンザイ!」と叫ぶのは簡単だが、この2年間本当に斉藤さんが会長でよかったと、ご本人も会員の方々も思っただけのようにサポートしようと思っている。

（こがふとし／副会長、日本大学）

# 思ってもみなかったこと

第24期総務委員会委員長 佐藤 由紀

第24期総務委員会の委員長を務めることになった。我ながら驚いている。正副会長を決める理事会の数日後に、新会長の斉藤さんからご依頼のメールをいただいた。前期、若輩者である私が委員のみなさまの力を借り、研究企画委員会の委員長をなんとか「こなし」ため、もしかしたら今期も研究企画委員会でご依頼があるかもしれない、という覚悟はあったが、まさか「総務委員長」とは予想だにしていなかった。

斉藤さんのメールには、映像学会に新しい風を吹かせるために、とあった。確かに、いままでの映像学会は少し「お堅い」ところがあった。それが良いところでもあり、一方で、そのことにより身動きが取れなくなっていると感じるところもあった。また斉藤さんが初の女性会長になったのは、私たち後進の女性研究者らへの激励であろうと感じていた。そんな斉藤さんからの依頼をむげに断ることもできず、一日考えた。考えても結論がでなかった。考える材料もなかったためだ。

いままで人生の中で何回か「思ってもみなかったこと」に遭遇したことがある。そういった場合、えいやと飛び込んでみると、案外「思ってもみない面白いこと」に遭遇することがほとんどだった。おそらく私が楽観的な人間であることも要因の一つではあるが、必死に真っ暗な海を泳いでいると、実は隣にライフセーバーがいたり、後ろから声をかけてくれる仲間が現れたり、遠くにぼんやり明かりが見えてきて陸地があることがわかったりして、「ああ、なんとかなるかも」とほっとし、これまた思ってもみなかった力がみなぎって泳ぎきれることがよくあった。そんなわけで、メールをもらった次の日の夜に斉藤さんへ了解のメールを送った。

総務経験もなく、理事歴も浅く、映像学にも貢献といえる貢献が全くできていない、ないないづくしの私が、総務委員長を務めることに、おそらく不安を抱えている方も少なからずいると思う。その気持ちは私もよくわかる。しかし大丈夫だ。私を総務委員長に任命した斉藤さんが「今回はチーム戦で」と言っている。総務委員会には総務委員長や副会長を務めたことのある方々や総務委員を長く務めている方々が複数いる。理事会にも経験豊かな方々が多くいる。事務局も頼りになる方が務めてくれている。今期、みなさんの知恵や力をお借りして、オープンマインドで総務委員会を進めていくつもりである。

(さとゆき／総務委員長、玉川大学)

# しなやかな連帯へ

第24期研究企画委員会委員長 富田 美香

新体制での初理事会が開催された7月25日と9月5日の2回、研究企画委員会を開き、新規研究会と研究会活動費助成について、公募から審査までを行った。コロナ禍の最中に、新規研究会1件、助成3件の申請受理と審査を経て、会員諸氏の研究活動への旺盛な意欲とともに、この委員会をガッチリと且つしなやかに支えてくれる委員の皆さんの有難さを実感した次第である。

恥を承知で告白すると、自分が映像学会の大会に参加し始めたのはかれこれ30年前であり、大学に職を得て学会員になって20年経つが、今まで1度も大会発表の申請や『映像学』への投稿を考えたことがない。制約の少ない研究会や紀要以外、労をかける気が無いのである。関西支部の幹事や理事を務めたのも、院生を育てる立場の大学教員として、若い世代の発表の場を分担運営する責務があると思ったからであり、だからこそ転職後は理事を辞退し、アーカイブの仕事に専心した

のだった。その自分が今期理事の受諾を考えるに到ったのは、『映像学』103号の巻頭エッセーの一撃につきる。斉藤さん、そして京都在住時代の“飲み友”(と勝手に思っている)であった菅野さんと木下さんの、熱気すら感じられる、強烈な“連帯の呼びかけ”であった。自分は今まで、“女性がいた方が”という役職の依頼はハラスメント委員以外片っ端から断ってきたが、「女性会長をここで迎えたい。次の世代に新風を送りたい」と強く思った。

会長から、委員長を女性で揃える案を聞いた時、大笑いして二つ返事で引き受けた。上述の通り、不適格と自覚しているが、女性理事は3人のため、“連帯”を前に、選択肢はない。自分が学会から長年得てきた大きな恩恵が、多様な分野・地域の人たちとのつながりにあったことに鑑み、委員会は、各支部の声や状況を直接共有・検討できるよう、多彩な研究会活動も展開できるよう、全支部から構成し、実作系の比重も多くした。受けて下さった委員の皆さんへの感謝とともに、会員の皆さんにも、次の世代により良い形で学会活動を開いていけるよう、当委員会への提案や要望も含め、しなやかな連帯を呼び掛けたい。

(とみたみか／研究企画委員長、国立映画アーカイブ)

# 画面越しの連帯

第24期機関誌編集委員会委員長 伊津野 知多

この人選にはとても驚いたけれど、異例だらけの今年にふさわしいチャレンジのようにも思われ、心もとないながらチーム斉藤に入れていただくことにした。まだ始まったばかりだが、会長はじめ理事の方々にZoomやメールの画面越しに連帯を感じている。同じ大きさで表示される参加者全員の顔を数時間見つめながら行うオンライン会議は民主的な感じがしなくもないし、背景の選び方などに対面では気づかない個性が感じられたりして新鮮でもある。

今期の機関誌編集委員会には理事以外の会員の方に多くご参加いただくことができた。快くお引き受けくださったみなさまにお礼を申し上げます。フットワークの軽い副委員長と、率直でユーモアのある発言が持ち味の前委員長の心強い支えもあり、機関誌編集チームは和やかに始動している。

喜ばしいことに『映像学』への投稿本数は年々増えている。今期からは編集委員以外の方々にも広く査読をお願いすることで、会員同士の対話の第一歩である査読のプロセスを充実させたいと考えている。ぜひ会員のみなさまのご協力を賜りたい。また、23期から始まった「巻頭エッセー」も継続していく方針である。今年は研究活動や創作活動、成果発表もコロナ禍の影響を免れないが、機関誌の紙面やオンラインの研究会でもできることはまだまだたくさんある。本学会の多様性を活かしつつ、『映像学』を投稿者にとっても読者にとってもいっそう刺激的で魅力的な場にできるよう務めたい。

(いづのちた／機関誌編集委員長、日本映画大学)

# ビデオアート研究会

瀧 健太郎



作品展示の会場から中継したビデオアート研究会vol.23

## 第23回ビデオアート研究会

内容：「情報過多社会における機械的視き」

日時：2020年8月23日(日)11:00-13:00

オンライン開催：



[https://videoart-research.](https://videoart-research.blogspot.com/2020/08/23823.html)

[blogspot.com/2020/08/23823.html](https://videoart-research.blogspot.com/2020/08/23823.html)

(QRコード：上記リンク)

パネリスト：飯田豊（立命館大学産業社会学部准教授）、毛原大樹（ラジオ・アーティスト）、瀧健太郎

ディスカッサント：河合政之

協力：MORI YU GALLERY、技術協力：丸山真貴子

### 概要：

今回は京都で開催されていた展覧会「瀧健太郎 窃視症マシン」会場から、作者による解説とパネリストを交えた討論を配信形式で行った。まず会場から、作品の紹介とそれらで多用される、カメラ自体になり意識的に覗く、またはモニター自体（表象イメージ）になって覗かれることといった「カメラ/モニターのシステム」（＝機械的に見る）に憑依される感覚などの制作意図が瀧から提示された。

次にビデオのメディアとしての特異性と社会の関係の観点から、飯田豊氏から初期ビデオアートに関わった作家たちがケーブルTVやパブリック・アクセスの先駆けとしてその開拓に少なからず寄与したことから、対抗的なメディアの在り方に関わった事など事例を挙げられた。また毛原大樹氏は一旦デジタル化した情報産業の中で、空地となった周波帯域を利用し、オルタナティブなメディアとしてのラジオ局の設立を模索する例などが挙げられた。そうした新旧のメディア状況を踏まえ、ビデオアートにおけるカメラ・モニターシステムが単に現代の監視社会の最小単位を示し、対抗メディアやコミュニケーション論的観点から示されるのではなく、「見る・見られる」関係自体を造形や表現の中心命題に据える「メディアの可塑性」への言及についての議論の余地が少なからずあることが確認された。

討論形式となった後半では、瀧や毛原氏のアナログ機器や旧技術への執着がガジェット嗜好的であり、生や欲望のある種の倒錯的な傾向があることが指摘され、回顧主義的にアナログ志向に回帰するのではなく、次世代を迎

えたからこそ見えてくる新たな利用方法に作家たちが可能性を見出す潮流に、新技術信奉の傾向への一つの批判的な視点があることが認められた。

感染症対策の為、集まって研究会を行うことを回避した結果、通常東京で行われていた研究会を、地方発信かつ制作現場とパネリスト自宅など数地点を結んで開催できたことは意義があったと思われる。



WEB会議を通じたディスカッションの様子

### 今後の計画について

本研究会はビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足されました。今後も定期的にビデオアートを学術的に研究する試みと、制作や展示現場を現地調査する形で研究会を進めたいと考えております。研究内容は随時、参加メンバー内で話し合いを行います。

\*ビデオアート研究会はメーリングリストで研究会の情報や資料などを共有しております。研究会参加ご希望の方は、

[taki.kentarou@ebony.plala.or.jp](mailto:taki.kentarou@ebony.plala.or.jp)（瀧）までご一報ください。

（たきけんたろう／ビデオアート研究会代表、特定非営利活動法人ビデオアートセンター東京）

# アナログメディア研究会

水由 章、太田 曜

## 活動報告

■主催企画：リモート開催による研究会『コロナ状況下における実験映画活動～東京 / ニューヨーク』

日時：2020年7月12日 日曜日 11時～13時

ゲスト 西川智也氏（実験映画作家・ニューヨーク州立大学ビンガムトン校助教授、NY在住）

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会

場所：Zoom開催、定員20名

Zoomを使った遠隔での研究会

参加者：ゲストを含めて16名

内容は以下の通り。

(1)日本以上に深刻なコロナ感染状況下にあるアメリカでの実験映画作家たちの活動についてのレポート。NYと東京などの制作 / 上映の様子について情報交換。警察官による黒人男性射殺事件に関する報告も。

(2)映像教育において、主にフィルムでの実習などを行う西川氏や研究会メンバーが、コロナ状況下でどのように実習授業を展開しているか等、現状の情報交換。

(3)リモート開催イベントも含め、今後どのような活動が可能か等、自由に語り合う。

関連リンク

アナログメディア研究会協力企画として行ったオンライン上映会（別に報告あり）

コロナウィルスを克服する映画フィルム・プロジェクト

<https://filmproject-corona.jimdofree.com/>

作品の長さは8分です。

今回、新型コロナウイルス感染拡大の状況の中で、集まって上映やレクチャーを行うことが難しい中、初めての試みとして、リモートでの研究会を行った。テーマはコロナ状況下における実験映画活動。何分初めてのことでもあり、慣れない中での開催だったが、ゲストの西川氏はニューヨークから、他にも北海道、沖縄、など国内でも普段は研究会へおいでいただけない方々にもご参加いただくことが出来た。コロナ感染拡大という後ろ向きな状況下で、リモートでの研究会開催はリアルタイムで世界中の人と結んで研究会が開催できるという新たな発見があった。今後、コロナ感染拡大とは関係無く、こうした研究会開催も進めていきたい。

西川さんからの、アメリカ、特にニューヨークでの日常生活の状況や、黒人男性が警察官に射殺されたことや、その後の人種差別反対の運動の様子など、マスコミの報道とは異なる、リアルな報告があり、実際に生活している人の言葉の重みを感じられ、意義深いものだった。

西川さんのニューヨーク州立大学での実習授業の様子や、国内各大学関係者・研究会会員による実習授業のやり方は非常に興味深い事が多かった。この先、映像の実習授業についてのリモートでの研究会の開催も、企画として考えている。

大学での映像の実習授業だけでなく、実験映画のオンライン上映会については、アナログメディア研究会の協力企画でもある『コロナウィルスを克服する映画フィルム・プロジェクト』の報告があった。

研究会の録画：<https://youtu.be/qTYFgi4UL0>



研究会の録画は会員の方がご自身で鑑賞するためのものです。他のSNSなどにあげたり、コピーしたりはご遠慮下さい。

文責：太田曜（おおたよう / アナログメディア研究会代表、東京造形大学）

■研究会協力企画：『コロナウィルスを克服する映画フィルム・プロジェクト』

「MOVIE FILM PROJECT TO OVERCOME CORONA VIRUS」

コロナウィルスを克服する映画フィルム・プロジェクト

募集期間：2020年4月12日（日）～4月30日（木）

応募作品の公開：2020年5月3日（日）からYoutubeで公開

参加費無料

主催：「コロナウィルスを克服する映画フィルムプロジェクト」事務局

協力：日本映像学会 アナログメディア研究会

新型コロナウイルスの世界的な感染によって、フィルム・メーカー（映画フィルムのメディアを使って作品を製作している表現者）たちも作品の上映と発表の機会が奪われている。いつ、この状態が収束するのかわからないなか、映画フィルムの撮影・現像が厳しい現状でも、フィルムメーカーたちが、映画フィルムを使って映像を発信できる機会と場をつくれぬものかと、以下の企画を考えた。

「MOVIE FILM PROJECT TO OVERCOME CORONAVIRUS」は、個人で8ミリ、16ミリ映画フィルムを使って作品を発表しているフィルム・メーカーたちのメッセージ動画を募集し、ランダムにつなげてYoutube上で発信していくプロジェクトである。

どのような方法・要項でアナログメディアである映画フィルム作品を募集したのか、また募集した期間が日本政府からの緊急事態宣言が発令された時期にあたるため、あえて報告事項として応募要項と応募方法を以下に記載した。

<応募要項>

8mm（スーパー/シングル）、16mmの現像済み映画フィルム、生フィルム、フィルムリーダーに、10秒以上シネカリヤペイントを新たに（2020年4月11日以降）施して、自分でテレシネをした30秒以内の動画を募集する。但し、

政府からの緊急事態宣言が発令された2020年4月7日以降に撮影・現像されたフィルム(加工なし)のテレシネした動画もOKとする。

内容は問わないが、テレシネした以外の動画は加えないこと。動画に後から音声をつけるのは構わない。

簡易テレシネで構わない。スマートフォンなどで撮影した動画でもOK。

動画のフォーマットはフルHD、フレームレートは29.97fps、音声のサンプリングレートは48,000hzを推奨。他の形式は事務局で統一する。

#### <応募方法>

30秒以内にまとめた動画データを、自分でYoutubeにアップロードする。

Youtubeにアップロードした先のURLと、連絡先、メッセージを応募フォームから送信する。

#### ■応募作品(13作品)

- 1『病息』 香月泰臣
- 2『壁-2』 太田 曜
- 3『春とコロナと雪』 Johan Chang



『春とコロナと雪』

- 4『生態系-30』 小池 照男
- 5『クロマデブス花火』 阿部 和浩
- 6『marble』 よこえれいな
- 7『煮奴』 芹沢 洋一郎

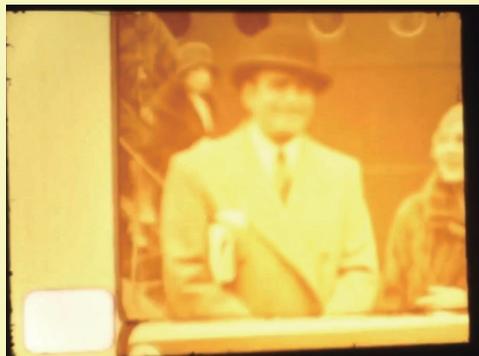


8『九条小町2』 万城目 純

- 9『揺曳(ようえい)』 能登 勝



- 10『energy - 0 -』 ムラカミロキ
- 11『光の書誌学』 大橋 勝



- 12『angel medicine』 伊藤 隆介
- 13『欺瞞』 水由 章



告知から応募終了まで3週間程度という緊急なプロジェクトであり、映画フィルムに加工もしくは撮影・現像したものを自分でテレシネをしてYoutube上にアップロードをすることが応募条件という、かなりハードルが高いものではあったが、各地から外国の作家含めて13作品が集まった。

インターネットを活用して、Zoom等を使ったオンライン講演や会議、授業が当たり前になりつつある現状で、映画フィルムというアナログメディアの映像でもインターネット上で作品に応募し、発表することが可能となる事例をつくることが一番の成果だった。

## アジア映画研究会

韓 燕麗

「コロナウィルスを克服する映画フィルム・プロジェクト」Web Site  
<https://filmproject-corona.jimdofree.com/>

文責：水由 章(みずよし あきら／アナログメディア研究会共同代表、ミ  
 ストラルジャパン、「コロナウィルスを克服する映画フィルムプロジェ  
 クト」事務局)

活動報告

◎第3期第1回(通算第34回)例会

日時：2020年8月4日(火)18時～20時

会場：Zoomによるオンライン開催

座長：韓燕麗(本学会員)

内容：

①発表「シネマ・シティとツイ・ハーク——集団創作における監督」雑賀広  
 海(さいか・ひろみ/本学会員)

②発表「映像空間はいかに歴史の時間と記憶を表象するのか——『ドキュ  
 メンタリー作家王兵 現代中国の叛史』を読む」晏妮(あん・に/本学会員)

8月4日に第3期第1回のアジア映画研究会をオンラインにて開催し  
 た。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、やむをえず4月と6月に予定し  
 ていた例会の開催を2回中止したが、今年度に入って初めて行われた今回  
 の例会は、Zoomによるオンライン開催のメリットを最大限に発揮し、首都圏  
 以外や海外から参加した会員を含め、当日約40名の参加者が集まり、活発  
 な議論を行った。

二つの発表のうち、第一発表の雑賀広海会員による「シネマ・シティとツ  
 イ・ハーク——集団創作における監督」では、1980年に設立された香港の  
 映画会社シネマ・シティの功罪について、ツイ・ハーク監督を中心に再考す  
 るものであった。集団創作という作家主義とは相反するようなシネマ・シティ  
 の製作スタイルが、同時期に台頭しはじめた香港ニューウェーブの監督たち  
 と、1980年代の香港映画産業に与えた影響について探った。とくに、集団創  
 作の経験はツイ・ハーク監督にとってどのような点で有益であり、その後の  
 製作でも参照されたのかについて具体例を提示しながら、詳細に分析した。

第二発表の晏妮会員による「映像空間はいかに歴史の時間と記憶を表  
 象するのか——『ドキュメンタリー作家王兵 現代中国の叛史』を読む」は、  
 今年4月に刊行された王兵監督を論じる最初の日本語著書『ドキュメンタ  
 リー作家王兵 現代中国の叛史』(土屋昌明・鈴木一誌 編、ポット出版プラ  
 ス)についての書評であった。四部からなる本書の構成と書き手たちがど  
 のように王兵を捉えているのかについて丁寧に紹介しながら、王兵監督の歴  
 史に向き合う姿勢、被写体との関係性を考えた上で到達した映像テクニク  
 についても言及した。

参加者からは、第一報告に対して、具体的な映画作品の制作背景や集団  
 制作というスタイルに対する発表者自身の評価についてコメントや質疑が  
 あり、応答がなされた。第二報告に対しては、ドキュメンタリー映画におけ  
 る撮影者と被撮影者の関係性の問題や、字幕の問題などについて参加者から  
 積極的な発言があった。

今後の研究会にとっても興味深い内容が盛んに議論されたが、終了後の  
 懇親会の場でさらに議論を深めることができないのは、オンライン研究会の  
 残念なところであろうか。新型コロナウイルスの状況が収束し、対面で熱い  
 議論を交わす日が一日も早く来ることを切に願っている。

(かん・えんれい/アジア映画研究会、東京大学)

# 日本映像学会第47回大会 第一通信

大会実行委員会委員長 関口敦仁

学会ホームページの速報でお知らせしましたように、来年、2021年6月5日(土)、6月6日(日)に日本映像学会第47回大会を愛知県立芸術大学で開催します。今回は「ポスト・ドキュメンタリー：映像とアートの新しい質(仮)」をテーマとしました。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、大学研究機関は遠隔授業を、映画、映像制作現場は延期を余儀なくされ、これまでと異なった手法による興行も考えざるを得ない状況です。私自身も遠隔授業を行う中、遠隔映像越しに広げられる授業空間や、時々の対面との混在授業などもあり、改めて、映像越しのコミュニケーションやリアル空間との境界感覚が薄れてきているような感覚を覚えます。同じ感覚が全世界共通に広がっていると考えてみた場合に、これまで映像が持っていた、ドキュメンタリーの領域が、拡張しているのではないかと改めて感じる機会を得た気がしました。

近年の映像表現において、このドキュメンタリーが、フェイクなのか、リアルなのか、ライブなのか、という状況の事実を確認することより、ドキュメンタリーの質が新しい表現の方法論として、自由になりつつあるのではないのでしょうか。かつてリュミエール兄弟が作った駅に列車が到着する映像に市民が驚いて逃げ回ったというまことしやかな話と同様の価値変異が心に起きつつあるのでしょうか。映像コンテンツやその配信、映像間による遠隔コミュニケーション、映像によるパーソナルプロフィールを晒すSNSなど、当たり前前に繋がる世界がすでにリアルである今、それらをめぐるの身の回りの世界もすでに不思議な接続感覚で結ばれてしまっているようです。そのような世界を描いた映像作品はコンテンポラリーアートの世界においてはすでに多く存在し、ポスト・ドキュメンタリーと呼ぶ新たな視点によって、その表現を語り始めているようです。過去のドキュメンタリーの枠を超えて、映像が新たな質を掴み始めているのではないかと、それらを体現するためにも、会員皆さまの議論を期待したいと思います。多くの会員の参加をお願いいたします。

おそらく、2021年度においても、感染症対策の必要性から、ソーシャルディスタンスや、体温チェック、窓を開けた換気の確保などを行いながらの開催となると思われます。会食を伴うパーティやグループエクスカッションの開催などは、難しいとは思いますが、会員皆さんの研究発表の場として、活用していただければと思います。

日本映像学会第47回大会のご案内

大会テーマ：「ポスト・ドキュメンタリー：映像とアートの新たな質(仮)」

会期：2021年6月5日(土)・6日(日)

会場：愛知県立芸術大学

〒480-1194 愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-114

第47回大会実行委員会

実行委員長：関口敦仁(愛知県立芸術大学)

実行副委員長：森 真弓(愛知県立芸術大学)

実行委員：石井晴雄(愛知県立芸術大学)

実行委員：茂登山清文(名古屋芸術大学)

実行委員：伏木啓(名古屋学芸大学)

実行委員：宮下十有(椋山女子学園大学)

実行委員：平川祐樹(愛知県立芸術大学)

実行委員：村上将城(名古屋学芸大学)

実行委員：片山一葉(愛知県立芸術大学)

(せきぐちあつひと／第47回大会実行委員長、愛知県立芸術大学)

# 編集後記

総務委員会 加藤 哲弘

会報189号(PDF版)をお届けします。

いつものことであれば、秋の号は冊子体でもお届けするはずでした。通常であれば5月末に開催される大会の報告、今年の場合にはそれに先立つ役員選出結果の報告、総会報告、さらには新入会員などが掲載されるためです。ところが残念なことに大会が延期となり、今号はPDF版で発行されることになりました。

5月30日の理事会で選ばれた新会長の挨拶も本来であれば冊子版に掲載されるはずでした。しかし次号を待てば年を越してしまいます。そこで今号では、新会長からの提案により新会長、2人の新副会長、そして3人の新委員長からのメッセージを「展望」に掲載することになりました。「開かれたコミュニティに向けて」息苦しい世界に新鮮な風を送り込もうとしている新しい執行部にご支援とご協力をいただければ幸いです。

5月末から9月末に延期され、初のオンライン開催となった今年の大会も何とか無事に終了しました。困難な課題を引き受けて円滑に大会を運営していただいた関西大学の関係者の皆さまに感謝します。そして、愛知県立芸術大学で開催される来年の大会では、対面コミュニケーションのなかで多くの意見や情報が交換できるようになることを願っています。

(かとうてつひろ／総務副委員長、関西学院大学)